

その根本の立場から、法華經をどう読むべきかを、大聖人は御義口伝として残してくださっている。この御義口伝を、深く、厳格に拝しながら、二十一世紀へ「法華經を語る」
壮大な挑戦の旅を、読者とともに始めたい。若き諸君の英知を借りながら。

それは、どこまでも「自分自身が仏である」という真理への旅である。人生とは、自分自身への永遠なる旅なのです。

人類の意識革命の必要を痛切に語った詩人に、ヘルマン・ヘッセがいたね。彼は今世紀の病を、鋭敏に感じとっていた。

彼の「書物」と題する詩が、私どもの法華經探求にも示唆を与えてくれます。

「この世のどんな書物も

君に幸福をもたらしてくれはしない

けれども書物はひそかに君をきとして

自身の中へ立ち返らせる